

続 千葉県 ハツタケ 事情

吹春 公子

会報 21 号での報告から早 3 年、その後千葉県のハツタケ事情はどうなったのか、前回と同じ場所を訪ねてみることにした。とはいえ、いつ入荷し店先にならぶのか、お店に聞いたとて天然ものゆえにわからないというのが正直なところ。消費者としては最大限こまめに足を運ぶしかないのだが、あちらこちらのお店を毎日訪ね歩くわけにはいかず、しかも流通するだけの量がないとなかなか目に触れることがない。だからこれは運しだい。

9 月中旬、台風 13 号が進路を東へゆっくりと進みはじめていた。千葉駅至近の大型百貨店をのぞくと、「千葉県産初茸」が置かれていた。明るい橙色、あばたのある足、変色なし。以前と同じ状況で売られているアカモミタケだった（写真 1）。雨のなか採集したとおもわれる泥まみれの幼菌。千葉では雨はほとんど降っていない。前線と重なって中部・東海地方は前日大雨、ひよっとして。

9 月下旬、老舗百貨店はどうかとみると、おっ！ここにもアカモミタケ。しかしポップに掲げられた文字は「静岡県産赤初茸」であった（写真 2）。さすがは老舗、正直である。このところ世間を騒がせている産地偽装はないようだ。以前と比べると名前に赤の文字が加えてある。アカモミタケは色が赤いゆえにアカハツに見紛う、でもアカハツと書いてしまえばこれは誤り。だからアカハツ+ハツタケ=アカハツタケなのだ。しかも漢字で書いてある。アカハツタケは標準和名ではないので、通称もしくはキャッチコピーのようなものとすれば、このくらいは許されるのかもし



写真1:「千葉県産初茸」は極小粒のアカモミタケ



写真2:「静岡県産赤初茸」はアカモミタケ



写真3:千葉県産のレンコンと一緒にならぶ「千葉県産緑青初茸」



写真4:「千葉県産はつたけ」はいずれも千円を切る大特価、状態によって値段が異なる

れない。

さらに1週間後の10月初旬、同所で今度は「千葉県産緑青初茸」に出会う(写真3)。これまた素晴らしいネーミングである。奥沢康正・奥沢正紀著『きのこの語源・方言事典』

(山と溪谷社、1998)によれば、「ろくしょう」は千葉夷隅・君津地方でハツタケをさすとある。「ろくしょうはつたけ」は秋田雄勝地方でハツタケをさし、「ろくしょうはつだけ」は山形でハツタケをさすとある。そのほか、「ろくしょう…」という名前は東北でハツタケをさす言葉が多いようだ。しかし同時に「ろくしょうはつたけ」は現在無効名との説多しとあるがアカモミタケをさすとあるのでちょっと複雑である。千葉県では変色するハツタケを上記のほかホンハツ、ホンキノコのように本物のハツタケの意味を込めてホン——と呼んでいる。だからここでは前者が正しく、緑青色に変わる本物のハツタケだよとっているのである。パックをじっくりながめると、変色のある暗色のもの、アカハツとおもわれる変色が確認できる明色のもの、変色がほとんどなく橙色が強いものが混じっている。柄を見てみると、そう多くはないが少々あばたがあるものも。とすればこれらは3種混合? 石附の土壌は砂まじりの泥。売り場の人に聞いてもさすがに採ってきた場所までは仕入れの人も特定できないだろうという。ちょうど東北地方のマツタケシーズン。静岡県産のように量があればハツタケも一緒に流通してもおかしくはなさそうである。

しかし前回から正直な老舗を信じるとすれば、産地はあくまでも千葉県内なのである。3種が別に採集されてパックされたとは考えにくいため、これらの採集場所は3種が同時に生え得る所。アカモミタケが鍵をにぎっているとすれば、いわずと知れた海岸砂防林ではなく、モミヤコメツガ、ヒメコマツの混じる房総丘陵の可能性があるのでないだろうか。千葉県のきのこの方言が記録された夷隅・君津は房総丘陵とよばれ、かつて海の中で堆積した砂泥互層が隆起した地質であり、縄文海進で削られた入り組んだ谷津のやせて風化した尾根にこれら樹木は生えている。最近では地産地消が推奨されて地元の新鮮なものや地

方色豊かなものが、道の駅や直売所などで売られる傾向にあるなど流通経路がすこしずつ変わっているようだ。いままで県内の発生地ではハツタケは余り売られていなかった。しかし、少量でも販売できる施設が近くにでき、商売になるとすればそれは地元にとどまる確立が高い。朝市の拡大版のようなものだ。ハツタケはマツ林の近くで売っているほうがなんとなく採れたて新鮮という付加価値がありそうだし、海岸のものは身に砂が入りこんでいてジャリジャリするから美味しくなく、内陸の土に生えたもののほうが味がいいと消費者の、またすこし話はそれるが外国産マツタケでも砂地で採れたものは砂が入っていて品質が落ちるので扱っていないなどといった流通者の声を聞いたこともあり、房総丘陵のハツタケが品質重視の老舗にならんでいるのは充分納得できるのである。あとで気がついたのだが、この日ハツタケの隣には千葉県産のハスが並んでいた。千葉県産のレンコン生産地は北総水郷地域が有名だが、産地のひとつとし

て湧水豊富な君津地方がある。たんなる偶然かもしれないが、本日のトピック入荷のワゴンにならんだ双方は、どうやら一緒に流通した君津産の可能性がありそうだ。

10月中旬には千葉市内の小規模スーパーで、数枚のモミ属のおそらくツガとおもわれる枯葉が混じる多量のアカモミタケが以前と同じく「千葉県産はつ茸」として廉価で売られていた（写真4）。

余談であるが9月下旬から10月初旬は内房の海岸でハツタケが沢山採れたそうである。おそらくこれらも自家消費のほか一部は店先を賑わしたことだろう。

千葉県産のハツタケ流通事情を推測するのは意外とおもしろい。いずれにしても、ハツタケと称して依然アカモミタケが売られている。しかし悲しいかなどこもほとんど売っていない様子だった。千葉県人にハツタケが見向きもされなくなるのが先か、アカモミタケがアカモミタケとして売られるのが先か、今後もしっかりとみていきたい。

2008年度行事報告の続き



2008年10月18日の第54回観察会集合写真